『中年スーパーマン左江内氏』の最終回を読んで（ネタバレ注意！）

F 同現会長

『中年スーパーマン左江内氏』を読んだ。この作品を読んだことがない人もいるだろうにいきなり最終回の話をするが，スーパーマンとなって人々を救うことになった主人公の左江内氏が，別のとあるスーパーマン（実はパーマン 4 号だったりする）に出会う場面がある。パーマン 4 号は，その特殊能力を生かして，運送業を営んでおり，共同経営者にならないかという話を左江内氏に持ち掛けるのだ。最初は，スーパーマンが内職だなんて，と驚く左江内氏も，パーマン 4 号の話に興味を持ち始める。

実際に共同経営者になったかどうかまでは描かれていないが，なぜ左江内氏はパーマン 4 号の話に興味を示したのか。実はこの時，左江内氏はスーパーマンの仕事をやめようとしていた。正義とは何か，悪とは何かが分からなくなってしまったのだ。そんな左江内氏に，パーマン 4 号は次のようなことを言う。

「百人寄れば百人の正義がある」

「スーパーマンの力や責任を過大に考えるから，気が重うなりまんのや」

この作品では，スーパーマンの仕事に金銭的報酬はない。その上，スーパーマンが助けてくれたという事実は，当事者たちの記憶からは消される。つまり，「ありがとう，スーパーマン」と言ってもらえることもない。困った人々を救う，そのために特殊な能力を授けられたスーパーマンは，本来ならば，スーパーマン業に専念すべきなのかもしれない。ただ，誰にも感謝されないこの仕事，専念するのは常人には厳しすぎるのではないだろうか。

ところが実は，そもそも左江内氏はスーパーマンに専念しろと言われてスーパーマンになったわけではない。先代のスーパーマンからも，会社の昼休みやトイレのついでにやってくれたらいいと言われていたのだ。一人のスーパーマンがカバーできる範囲などたかが知れているのだから。パーマン 4 号にかけられた言葉だって，似たようなことは既に先代から聞いていたわけで，それを分かってスーパーマンになったはずなのに，スーパーマンとしての活動を重ねる中で，世の中が何もいい方向に動かないことをふがいなく思い，どうしようもない虚しさに襲われることになってしまったのだ。

現実の世界にスーパーマンはいないが（実はいたりして），上に書いたようなことに近い感情を抱く可能性がある仕事は，たくさんある。教師や医療従事者などがその例だろうか。仕事でなくてもいい。一人で抱え込む必要のないことを一人で抱え込み，自分の無力さを感じ嫌になるというのは，経験のある人も一定数いるのではないだろうか。そして一旦こうなると，本来自分が出来ることすらも出来なくなったりする。そもそも一人だけでどうこうなるものではないのに。

左江内氏が運送業に興味を示した理由，それは役に立っている実感が欲しかったのではないだろうか。やはり何かしたとき，その相手から，行為に見合った反応がないと，悲しい

ものなのだ。スーパーマンの仕事のように，正義や悪がどうだとかそんなことは考えなくて良くて，ただ荷物を運ぶ。しかしそこには，荷物を運んでほしい人，受け取りたい人からの感謝がある。それだけでも，何もかも嫌になった左江内氏には，救いだったのではないだろうかと，最終回を読み終えた私は勝手に考えていた。

いくらスーパーマンとしての能力を授かったからと言って，左江内氏がごく普通の中年サラリーマンであることに変わりはない。この記事は全体を通して何だか暗い話になってしまった気がするが，この作品はそんな暗い話ばかりではなく，むしろ中年のおじさんが自分の日常を崩さない程度に，うまくやりくりして困った人を助ける様子を描いた，とても面白い，くすっと笑えるような作品である。下手な文章ではあるが，せっかくこの記事に目を通していただいているので，皆さんも是非一度『中年スーパーマン左江内氏』，読んでみてほしい。